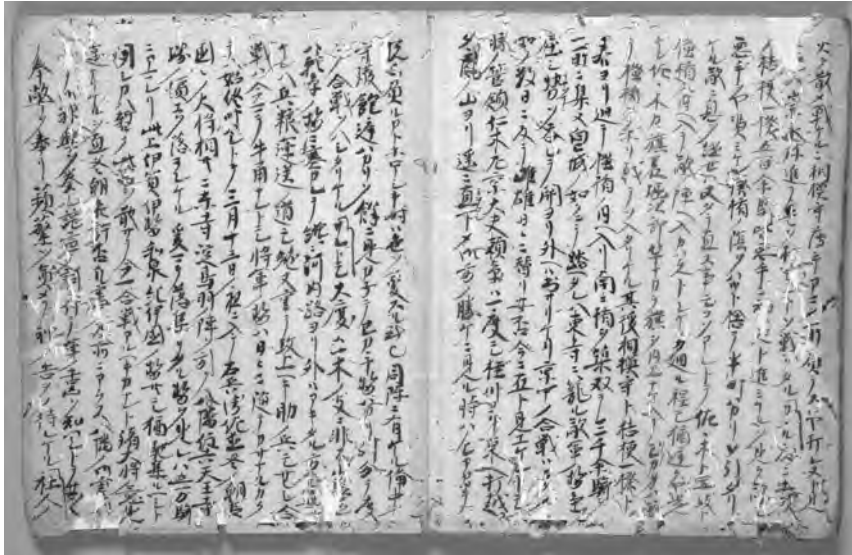


『太平記』の最古写本

— 永和本『太平記・秋夜長物語』 —



『太平記』の一部



『秋夜長物語』冒頭

鎌倉末期から南北朝にかけての動乱の時代を描いた『太平記』四十巻は、『平家物語』とともに、日本中世の軍記文学を代表する雄編として知られる。その作者については諸説あるが、全巻が一人の作者の手になるのではなく、複数の作者によって書き継がれたものと考えられている。成立年代は、応安四年（一三七一）八月以降に起きた事件が書かれているのでそれを遡ることはなく、また洞院公定^{こういんこうじょう}の日記の応安七年五月三日の条に「太平記作者」のこじまほうし小嶋法師が没した記事があり、「太平記」の返却について記した永和三年（一三七七）九月の書状があること、そしてここに取り上げる永和年間書写本の存在から、応安末〜永和頃、ほぼ一三七五年前後と推定される。

国文学研究資料館には、一巻のみながら、『太平記』の成立にごく

近い時期に書写された、現存最古写本が蔵されている。この本は、やや特異な形態を持っている。すなわち、『太平記』巻三十二の目録と本文を書写した袋綴の冊子本が作られ、その後、丁の折目を切り開いた内側の白紙部分に、僧と稚児の情愛を題材とする稚児物の御伽草子『秋夜長物語』^{あきのよのながものがたり}や、経文の抜書・漢詩・蹴鞠の口伝など、各種の記事が書写されているのである。

『秋夜長物語』に永和三年二月に書写した奥書があり、『太平記』の本文の後に永和元年（一三七五）三月の年時を持つ記事が付載されていることから、『太平記』もほぼ永和元年三月から永和三年二月の間に書写されたと考えられ、「永和本太平記」と通称されている。これに次ぐ古写本は十五世紀後半のもので、その他の写本は十六世紀以降に下る。わずかに一巻分ではあるものの、現存する『太平記』の写本の中で飛び離れて古く、成立や本文の変遷を探るための資料として重視される。

この写本は、『徒然草』の研究者で関係資料の収集家としても知られる高乗勲氏^{こうじょういさお}（一九〇四〜一九八〇）の旧蔵で、氏によって昭和三十年に学界に紹介された。『徒然草』の写本・版本をはじめとする古典籍約七〇〇点とともに、二〇〇一年度に御遺族から国文学研究資料館に移譲され、特別コレクション「高乗勲文庫」の中に収められている。

（落合博志）

△参考文献▽
国文学研究資料館編『田安德川家蔵書と高乗勲文庫―一つの典籍コレクション―』（二〇〇三年、臨川書店）